

武田美穂展 絵本づくりはドキドキなのだ！

●2026年7月25日(土)～10月25日(日)

主催：ちひろ美術館 協力：ポプラ社、ほるぷ出版、理論社

後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区



図1 『となりのせきのますだくん』(ポプラ社)より 1991年



図2 『ますだくんのランドセル』(ポプラ社)より 1995年



図3 『オムライス・ヘイ!』(ほるぷ出版)より 2012年

“ますだくん”や“ざわざわ森のがんばちゃん”シリーズで知られる絵本画家・武田美穂。「エンターテインメントに徹して」描いていきたいと語る武田は、読者である子どもたちを常に意識した絵本づくりを展開し続けています。本展では、1991年以降の仕事のなかから代表的な絵本の数々を紹介します。

『となりのせきのますだくん』

1991年に出版された『となりのせきのますだくん』は、今年、刊行35周年です。主人公の少女みほちゃんと、同じクラスの少年ますだくんが登場する絵本は全5作のシリーズとなりました。

1作目の『となりのせきのますだくん』(図1)では、ふたりの関係性がみほちゃんの視点で展開します。消しゴムのカスがはみ出すと椅子を蹴ったり、給食で嫌いなニンジンを残すと大きな声で先生に告げ口したり……。内気なみほちゃんにとって、ますだくんはまるで怪獣のよう。お気に入りの鉛筆を折られたことで、とうとう泣き出してしまいます。

この絵本は、映画監督で脚本家でもあった父親の影響から、映画の手法を取り入れてつくられました。ひとつの場面を枠線でくる漫画のコマ割りのような描き方は、映画の絵コンテから発想を得たといいます。1頁に複数の場面が展開できるほか、線から体をはみ出すように描くことで、みほちゃんの目に映るますだくんの大きさを表したり、線の外に小さなみほちゃんを登場させて心情を語らせたり、枠線と周囲の余白を使って少女の心の世界を巧みに描き出しています。

「単純な線でも、心の動きをしっかりと伝えたくて」、イメージに近づけるために何枚も描くこともあったというみほちゃんの表情もこの絵本の魅力のひとつです。

4年後に出版された『ますだくんのランドセル』(図2)では、ますだくんの視点でみほちゃんとの出会いが語られます。1頁内のコマの数を増やし、5人姉弟の三男で、やんちゃで不器用ながらも、世話好きでやさしいますだくんの性格を丁寧に描いています。「鬱陶しいくらいに絡んできて、実はいいやつだったり」する多面性も、描きだしたことのひとつだったと語っています。「放浪癖のある子だった」という画家自身の幼いころの体験をもとに描いた『ますだくんとまいごのみほちゃん』も展示し、“ますだくん”シリーズから3作品を出品します。**リズムとあそびとナンセンス!**

「ナンセンスが好きなんです。つまり意味のない感じのもので笑えちゃう。笑って自分のなかで大事」と語る武田の絵本は、リズムカルなことばや変化に富んだ場面展開で惹きつけ、読者を理屈抜きに楽しめる世界へと導きます。

武田が「自分のなかではある意味ナンセンス」という「たべもの絵本」シリーズもそのひとつ。編集者との会話から、「よだれが出ちゃうくらいおいしそうな絵本」をつくろうと始まった企画です。3作目の『オムライス・ヘイ!』(図3)は、具材を準備しオムライスが完成するまでの工程を描いた絵本です。「いためるぞ ヘーイ!」とラップ調のリズムにのって調理が進みます。「単純な題材だからこそ、

絵本の原点である、めくり・リズム・盛り上がりを作りやすく見せられるんじゃないかって思った」と語っています。

最新作の『まるがかけたら』(図4)など、あそび心あふれる作品も出品します。

戦争と平和

武田は作家・那須正幹の文や遺稿に絵を描き絵本を制作しています。3歳のときに広島で被爆した那須は、戦争の記憶が薄れつつある現代を危惧し、その思いをことばにしました。『ねんどの神さま』(図5)は、戦争で家族を失った少年・健一が小学校の授業でつくったねんど細工の“戦争犯罪人をこらしめる神さま”が、50年後、巨大な怪物となり、兵器会社の社長になった健一のもとへとやってくる話です。戦争というテーマに、武田は手元にあったあらゆる画材を使い、それまでの絵本の画風とは違う重厚な表現で向き合いました。その33年後、那須が広島の被爆70年に合わせて依頼された合唱曲の歌詞をもとにした『やくそく』(図6)を手がけました。中学生のトオルは、自分のことを原爆で亡くなった兄と間違え始めた年老いた祖母に戸惑いながらも、祖母の笑顔を見て、「ぼくらはぜったい戦争なんかしない」と決意します。武田は、今を生きる私たちに“戦争と平和”について問いかけるこの作品を、過去の場面をセピアで、現在をカラーで描き分けかけて絵本にしました。人間の根源的なやさしさや思いを表現した「やさしい反戦」と語っています。

子どもの心をとらえ続ける武田美穂の絵本の世界をご覧ください。(宍倉恵美子)

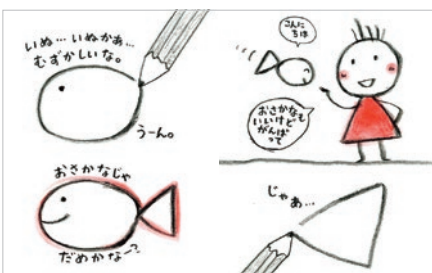


図4 『まるがかけたら』(理論社)より 2025年



図5 『ねんどの神さま』(ポプラ社)より 1992年

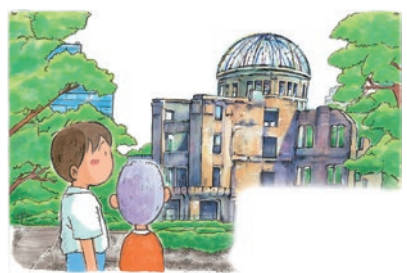


図6 『やくそく ぼくらはぜったい戦争しない!』(ポプラ社)より 2025年

ちひろ 子どもは平和のシンボル

●2026年7月25日(土)～10月25日(日)

主催：ちひろ美術館
後援：日本子どもを守る会



図1 大きな虹と子どもたちと働く人々 1960年代前半

子ども、花、鳩、平和のシンボル

ちひろ美術館の初代館長を務め、劇作家でもあった飯沢 匡^{ただす}（1909～1994）は、ちひろの没後20年に刊行された画集に、「子どもは平和のシンボル」という文章を寄稿しました。そこで彼はちひろの人生や画業の変遷にふれた後、こう結んでいます。「ちひろが子どもの姿を描き続けたのは、子どもが『平和』のシンボルに他ならないからだと思ふ。人々がちひろの作品を今日もなお愛さずにはおかぬのもまさにその心であろう。」

飯沢も記しているように、ちひろは若いころの戦争体験や敗戦を経て平和の尊さを深く感じ、それを新たな出発として、画家への道を歩み始めました。愛する子どもたちの姿を描くことで、ことばはなくても、絵から彼女の想いは見るものに伝わってきます。

子どもたちのほかに平和のシンボルといえる花、虹、鳩などが描かれ、平和そのものの世界がちひろの作品にはあります（図1・2）。



図2 鳩と少年 1965年

「子どものしあわせ」

ちひろの作品を、多くの人たちに届けたもののひとつに、月刊誌「子どものしあわせ」の表紙絵があります。この雑誌は、1952年に結成された日本子どもを守る会が1956年から発行した、「父母と教師を結ぶ教育雑誌」でした。

日本子どもを守る会は文学者や教育者など文化人53名と20の団体の賛同を得て

結成し、初代会長は「原爆の子」の編さんで知られる長田新です。会の設立の背景には戦後の子どもたちの困難な状況に加え、1950年の第1回国際子どもデーや、1951年に制定された児童憲章などの動きがありました。「花には太陽を 子どもには平和を」のスローガンで、さまざまな活動が全国で行われていきます。

「子どものしあわせ」の初代編集責任者であった羽仁説子は、「しじゅうデモにも出られない私たちにとって、雑誌は月ごとに子どものしあわせを祈って進むデモの列とみられないでしょうか」と語っています。創刊号から8号までは表紙にピカソやローランサンが子どもを描いた作品が使われ、その後には子どもたちによる版画作品、画家・五百住乙人の描いた子どもの作品を経て、1963年3月号から、ちひろが表紙絵を手がけています。ちひろは1974年に亡くなるまで12年間表紙を描き、付録の絵葉書の絵にも起用されるなど、読者たちの目と心に残りました（図3）。



図3 貝がらと少女 1971年

母と子の姿

平和を表現するために、芸術家たちは母子像をモチーフに選ぶことがあります。どの子どもも母から生まれ、その子どもを守りたいという想いは、平和を希求する想いつながるからでしょう。

ちひろの描いた母子像を見ると、まず母親と子どもの表情が目に入りますが、多くの作品には、子どもを抱いたり支えたりする、母親の手や指が描かれていることに気づかされます。ちひろが、自分

の子どもを「さわって育てた」と語っていることばを想起させます。

1955年の、雑誌社からのアンケートで、どんな気持ちで絵を描いているかという問いの答えに、ちひろは「いまの私の願いは、すべての母親と同じように、戦争のない、平和な、ゆたかな世の中で、子どもたちをしあわせに大きくしてやりたいということです。」と記しています。ちひろが絵を描きながら育てた、ひとり息子・猛の姿が絵のなかの子どもと重なります（図4）。



図4 夏の母と子 1960年代前半

子どもたちからまなぶ

「子どもの心は、どこの国でも同じ」と語っていたちひろが文も絵も手がけた絵本の主人公は、子どもたちです。

『となりにきたこ』（至光社）では、少女が引越してきた少年と、最初は距離をおきながら、いっしょに遊ぶうちに仲良くなっていきます。途中で母親が少しだけ登場しますが、あくまでも脇役。ふたりの子どもたちの会話と、少女の心のなかの声、ナレーションが交互にテンポよくあらわれます。

出会って間もないころにはそっぽを向いていたふたりが、しばらくしてお互いに向き合い、そして最後の頁では並んでくがきをしている場面で終わります。

（図5）



図5 『となりにきたこ』（至光社）より 1971年

大人は、だれでも子どもであった時期があります。子どもの心を思い出し、子どもたちから学ぶことが、平和への鍵のひとつかもしれません。ちひろの描く子どもたちが、そのようなきっかけとなれば幸いです。（松方路子）

●次回展示予定 2026年10月30日(金)～2027年1月31日(日)

没後70年 茂田井武とパリの画家たち —^{カケラ}Parisの破片—

茂田井武(1908-1956)は1930年、21歳の春に世界放浪の旅に出ました。目指したのは芸術の都・パリ。1920年代から30年代にかけて、パリには世界各地から芸術家たちが集い、独自の作品を生み出していました。本展では当時パリに集った画家たちの作品とともに、3年に渡る欧州滞在中に茂田井が描いた3冊の画帳や、後年旅の記憶をもとに描いた作品などを紹介します。



茂田井武(日本)
アクロバット
1932-33年頃

ちひろ 旅のたのしみ

「絵をかくことの次に旅が好き」と語っていたちひろ。いつも携えていたスケッチブックには、美しい景色や、慌ただしい生活を離れゆっくり向き合った息子の姿など、旅先での感動が記されています。パリが舞台の映画を絵本化した『あかいふうせん』など、各地をその足で歩いた画家ならではの描写がみられる作品も多く残っています。スケッチ、写真、作品を手掛かりに、ちひろの旅の思い出をひもときます。



いわさきちひろ スキ一をする少年 1969年

ちひろ美術館・東京イベント予定 各イベントのご予約・お問い合わせは、ちひろ美術館・東京イベント担当へ。

掲載内容は予告なく変更する場合があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。お電話にてお問い合わせください。

TEL.03-3995-0612 chihiro.jp



〈展覧会関連イベント〉

●松本猛ギャラリートーク ※2回とも同じ内容です

○日時：8月2日(日) 14:00～15:00～
○参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要
ちひろのひとり息子・松本猛によるギャラリートークです。

●武田美穂ワークショップ 「ひみつきち迷路をつくろう！」

○日時：8月9日(日) 13:00～16:00
○講師：武田美穂(絵本画家)
○対象：小学生以上 ○定員：20名
○申し込み：要事前予約(7/9より公式サイト、TEL.にて)
ダンボールやいろいろな素材を使って、みんなでいっしょに迷路をつくります。詳細は公式サイトをご覧ください。



●高橋真樹講演会 もしも君の町がガザだったら

○日時：10月4日(日) 14:00～15:30
○講師：高橋真樹(ノンフィクションライター)
○会場：【ちひろ美術館・東京】
定員：40名/参加費：1000円(入館料別)
【オンライン】
定員：100名/参加費：700円
○申し込み：要事前予約(9/4より公式サイト、TEL.にて)
パレスチナで起きていることが、“遠くの世界の他人事”でなく、私たちににつながる問題であることを伝えます。

●ギャラリートーク

○日時：第1・3土曜日 14:00～14:30
○参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要

〈会期中のイベント〉

●障がいのある方のための特別鑑賞日

○日時：8月3日(月) 10:30～15:30
○参加費：無料(入館料別※18歳以下の方、障害者手帳をご提示の方とその介添えの方は1名まで無料)
○対象：障がいのある方とその介助者、通常の来館に不安を感じている方
○申し込み：要事前予約(7/3より公式サイト、TEL.にて)
障がいのある方や来館に不安のある方が安心して鑑賞できるように、休館日に開催する鑑賞会です。詳細は公式サイトをご覧ください。

●ちひろ忌・アトリエトーク

○日時：8月8日(土) 14:00～
○参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要

●ナイトミュージアム

○日時：8月22日(土) 10:00～20:00
この日は、開館時間を延長して20時まで開館します。特別イベントとして、17時～「ちょっとこわい絵本のじかん」、18時～「すごくこわい絵本のじかん」などを開催予定です。

●開館記念日・たてものツアー

○日時：9月10日(木) 11:00～14:00～
○参加費：無料(入館料別) ○定員：各回15名
○申し込み：当日申し込み(10時より受付、先着順)

●出張「子育てのひろば」協力：NPO 法人手をつなご

○日時：9月16日(水) 10:00～15:00
○参加費：無料(入館料別)

●敬老の日 9月21日(月・祝)

65歳以上の方は無料でご入館いただけます。

●わらべうたあそび

○日時：10月3日(土) 11:00～11:40
○講師：服部雅子(西東京市もぐらの会代表、はとさん文庫主宰)
○参加費：500円(入館料別)
○対象：0～2歳児と保護者 ○定員：10組20名
○申し込み：要事前予約(9/3より公式サイト、TEL.にて)

●絵本のじかん

○日時：第2・4土曜日 11:00～11:30
○参加費：無料(入館料別) ○申し込み：不要
協力：NCBN(ねりま子どもと本ネットワーク)

CONTENTS 〈展示紹介〉武田美穂展 絵本づくりはドキドキなのだ!…②/ちひろ 子どもは平和のシンボル…③/〈活動報告〉ラチョフと絵本『てぶくろ』の魅力&ロシア語で味わう民話絵本と、キリル文字の魅力…④/ひとことふたことみこと/美術館日記/風…⑤

美術館だより NO.229 発行2026年7月10日

ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2 TEL.03-3995-0612 テレホンガイド 03-3995-3001 FAX 03-3995-0680